

# 哲學研究

第三百六十三號

第三十一卷  
第六一冊

## 民族發達の諸段階 (承前)

白井二尚

(五)

近世歐洲は中世の地域的及び階層的なる民族への障礙の排除の進行と共に初まる。此の近世の發展を導いたのは、分立的なる封建勢力に對抗し又之の抑壓を努めた集權國家の君主と新興市民とである。地域的封鎖の撤去は先づ交通通信の發達増大に現れる。十四五世紀に至つて地域的移動が相當に安全になり、個人の旅行も初まり、使脚制度も起り、水運も盛んになつた。その後道路が大改良を受けて交通に更に變革が齎らされた (M. Weber: Wirtschaftsgeschichte 一九二三年、一八七—一八、二五五頁)。

これに應じて交通の要衝をなす都市が發達して、此處に固定商業が旺になり、十五六世紀には貨幣が西歐では支配的となると共に、その地域的差異も十六世紀には克

服された (右同書、二一八頁)。斯くの如くして經濟は小地域に限定されてゐた都市經濟の段階から國民經濟に進み、民族的な廣さに於て統一されるに至つた。

言語も亦地方毎に異なる方言がより廣い地域に共通なるものに代へられた。ドイツは、ホーヘンシュタウフェンの官廳の用いてゐた高地ドイツ語を以てしたルツターの聖書の翻譯によつて、高地及び低地に通ずる言語を得、イギリスは、文章語としてフランス語も用ひられてゐたのを、十四世紀の末葉に驅逐した後、各地の方言もロンドンを中心とする東部中央地方の言語によつて終息せしめられた。フランスでは *l'le-de-France* の方言が文章語として勝利を占めた (Mitscherlich 前掲書、一六〇—一頁、Barker 前掲書、一四六頁)。他方中世歐洲に共通で

あつた超民族的な古典ラテン語は、その發祥の地なるイタリアに於てさへ棄てられて、イタリア特有の言語が用ひられるに至つた。これはダンテに初まるが、此の故にダンテはイタリア民族の父と通俗的にイタリアでは仰がれてゐる (Joseph 前掲書、一九六頁)。

斯くの如く地域的細分封鎖が排除されると同時に、他方超民族的なる開放と普遍性との制限される事が、民族の形成確立には必要であるが、これが爲には先づロオマの影響から脱する必要があつた。此の必要は宗教改革によつて充たされるころ多大であつたが、ルツターはドイツ的なるものをロオマ的なるものに對立せしめ強調することによつてその改革を遂行し、ウルリック・フォン・フッテンはルツターより一層深く祖國的心情に貫かれてゐる (R. Michels: Zur historischen Analyse des Patriotismus, Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik 第三六卷、一九一三年、二〇頁)。フスはチエツコ人の民族的本能を呼び覺ました。宗教改革はイギリスに於いてもドイツと同様に、民族的團體生活の感覺を著しく強めた (W. G. Tennant 前掲書、二八一頁)。ロオマと絶縁せんとする宗教改革が成功したのは、既に右に述べた如き種々の因素によつて民族的文化共同體が形成されつゝあつて、新教

の興隆は之れが此の文化共同體と結合し、之を反省意識せしめ、之を強化しつゝ自己の支柱とした事によるのである。併しながら此の文化共同體と之を基底とする主觀的共闘は、當時未だ十分の内容を持ち十分に鞏固なるまでに到つてはゐなかつた。此の爲に宗教的情熱の高まるにつれて、それは民族意識を壓倒し、宗教上の共闘と反對は民族的な關係を攪亂し去つた事は周知の如くである。とは言へそれは一時の嵐として過ぎ去り、同時に宗派の如何を問はず宗教そのものの支配力が減退して行つた。社會の開放によつて聖書の傳承では説明解決の不可能なものが現れるに従つて、既に早く自由討論の勢が生じ、人間生活を宗教の囿外に置かんとする風が旺になつて來た。信仰の世界と知識の世界とを分つボム・バナチ・ウスの二重眞理説、聖書の權威から離れて實驗的研究を重んずるクザームスやダヴィンチ、國家と國法とを教會の教への外に置かんとせるマキアベリ、キリスト教の神性本位に對して人間性を強調し、現世主義の古代文化によつて人間の教養と文化とに貢獻せんとした人文主義者等は、斯かる傾向の先驅をなすものである。此の勢に乗じて君主は教會の抑壓に成功し、教會は國家の教會となり、僧侶は國家の奴僕と變じ、又教會の懲罰は警察の刑

罰となると共に、國家の裁判は教會のそのの上に立つた。

斯くて國王は國家内の宗教上の事柄に介入し、之を統制するに至り、宗教の地域的普遍性は重大なる制限の下に置かれることとなつた (P. Kampfmeier: Geschichte der modernen Gesellschaftsklassen in Deutschland 一九二一年、一三二頁)。

近世に於ける民族の形成に對する地域的障礙の撤去は、階層的障礙の破碎と聯關結合して進んだ。國內を集權的に統一せんとする國王と、封建的區劃封鎖を排して遠距離商業を安全且自由に行はんとする市民とは、相提携して貴族に對する壓迫反抗を中世末期以來強化し來り、又内亂外寇によつて舊い貴族の倒れたもの多く、更に商業資本主義の發展に伴ふ社會の經濟機構の變動に順應する術を知らず、徒らに昔日の夢を追つて生活の經濟的基礎を失ひ、或ひはまた奢侈遊樂のみ事として没落し滅び去るものもあつた (W. Sombart: Bourgeois 一九二三年、一三三頁 Weber 前掲書、二六六頁)。例へばセルバントスのドンキホーテは、斯くの如くにして崩壞没落の運命を辿りつゝあつた時代の貴族府、とりわけ小地主貴族乃至騎士が、新しい社會の現實に順應し得ず、徒らに昔日

の夢に耽ける様を描寫したものであつて、作者セルバントス自らも貴族の家柄の出身ながら、家運既に衰へ、正則の教育も受けず、軍卒、收税吏、文士等の生活を轉々として、困苦多難な道を歩いて一生を送つたのであつた。斯くの如くにして貴族はその數が減少すると共に、他方僧侶も前記の如く生の諸領域の宗教からの獨立やこれに基づく國王の政治的抑壓によつて、従前の高い地位から引下げられて、庶民に身分的に近づいた上に、都市に發達せる資澤に馴染んで俗化墮落し、人間的な餘りに人間的なものが教會内で餘りに廣い領域を占めたのみならず、當時の道德的感覚より遙かに低い行爲が犯され又噂されて (Mitschenlich 前掲書、一二二頁)、庶民と實際上何等異るところなきに至つた。斯かる事情は、ポツカチオその他の物語りや、人文主義者の書き物その他に於てよく窺ふことが出来る。右の如くにして上層民が低下し又縮小しつつある時に、下層民は上昇の勢を強めつゝあつた。即ち政務や軍務上の功勞によつて貴族の稱號を授けられる市民も尠くなく、ルイ十三世は一六二七年正月の勅令によつて、卸商人が貴族の資格を得る事を許可した。セヴァリイは人が屢、無錢飽に身を立てんと急いでゐる事を記し、モリエールはあゝ、る手段を講じて貴族

層に登らんとする富裕な町人の滑稽な姿を多く描いてゐる。十八世紀にはイギリスの多くの裕福な商人も、土地を獲得して紳士の家系の始祖となつた。彼等の子少くとも彼等の孫は良き國會議員、政治家、樞密院議員、司法官等になつた。又市民はその財力によつて競つて上層民の行爲様式を模倣攝取した。フランス革命の頃には貴族の家具調度にして、市民の所有せざるものはなかつたと言はれる。當時の上層民の風俗の怪奇なまでに大袈裟な外形は、下層民の上層模倣と上層民の自己にのみ特有なる新たな様式の設定との連続せる結果に外ならない。更に農民は西歐に於いては近世初期に農奴の身分から解放された。けれども當時は猶上下の距離が大きく、上層民は農民から疎隔してゐて、農民は低級なる存在として侮蔑嘲弄の對象とされるに止まつてゐたが、時と共に上下の接觸も増加して、農民に對する關心と理解も深まり、市民の勢力と自覺の進むにつれて、之と身分を同じくする農民の地位も漸次上昇するに至つた。ドンキホーテに於けるサンチョ・パンザは第一部に於ては農民の劣等性を體現するものとして愚弄されてゐるが、第二部にあつては高い地位に上り立派な働きを示す者に成つてゐるのも、農民の地位の上昇を反映するところがあると見

られる。

民族的文化共同體の成立に對する地域的及び階層的障礙の撤去は、此の撤去の主力となつた集權國家の成立と市民の擡頭との早かつた西歐に於いて早く進捗し、右の勢力の發展の遅れた中歐及び東歐では遙かに後の事であつた。併しながらフランスに於いてさへ階級的隔離は容易に衰へず、上下は一つの民族とは感ぜられ難かつた。

十七世紀にフランスの貴族は猶彼等と第三身分層との間には何等の同胞關係も存在しないと主張し、靴屋の子弟が彼等貴族を同胞呼びする事を拒否した(Hertz: *Wesen u. Werden d. Nation* 六七頁、註)。又地域的分化も長く殘存して、フランスの各小地域の住民は民族の名稱を以て呼ばれてゐた。例へば一七八三年以前には *nation* *bi-clonne, anvergnante, d'aphroïse* 等の言葉が用ひられてゐたのであつた (*Verhandlungen des zweiten deutschen Soziologenkongresses* 一九一三年、一五四頁)。此等水平垂直兩方向の區割隔離を決定的に排除したのはフランス大革命であつて、その時まで存続した一切の身分的特權と之に基づく差異とは破砕され、萬人の自由と平等が法の上に於て實現したと共に、法律・制度・慣習の地方的差異も亦撤廢されて、フランスは眞に單一不可分 (*une et*

indivisible) になつた。けれどもドイツに於いては、此の頃まだ農奴の解放さへ行はれず、十七八世紀は農民の最も陰惨な時期であつたとさへ言はれる程であつて (Lugan 前掲書、一一八頁)、フランス革命の影響によつて、十九世紀に入つてから解放が行はれ初めたのであつた。墺洪國の如きは一八四八年に、ロシアに於ては更に遅く一八六一年に至つて漸く農奴制が廢止された。斯くの如き事實によつても明かなる如く、中歐は西歐と全く事情を異にし、法律上の平等といふ近代的な感情は、十八世紀の一般ドイツ人には未知であつた (Kampffmeyer 前掲書、一三三頁)。又此等の國々には地域的區劃封鎖も長く存在し、十八世紀末に現今ドイツとして知られてゐる地域は約三〇〇別々の政治的集團に分裂してゐた。しかも民族的統一に反する此等小集團の首長たる封建領主は、絶對專制君主であつて、民衆に對しては此世ならぬ權勢を有するものと思はれてゐた程 (右同書、一二五頁)、上下の距離は著しかつた。斯くの如き封建的分裂が統一されるに至つたのは、ビスマルクによるドイツ建國に於てであつた。

以上略述せる如く、中世的なる地域的及び階層的なる區劃封鎖が縮小撤去されて、文化共同體が發展すると共

#### 民族發達の諸段階 (承前)

に、此の共同文化が猶一定の地域的限界を有し、その外に對しては特殊性を確保して、地域的分化を明確ならしめるにつれて、民族的文化共同體が次第に成熟して行つた。而して此の民族的文化共同體は何れも既に成立せる包括的なる人類社會を根柢にせるものであるが故に、各共同體の受ける否定を媒介として、民族的共屬の意識及び意欲が夫々の文化共同體の成熟の度に應じて現れ強化された。此の否定の主なるものは各共同體の經驗せる外部との鬭争である。英佛共に百年戰爭の末期には民族意識が強まり、これによつて戰爭の規定されるころ甚大であつた。deutsche Nation など語も Deutschland なる語も共に、宗教改革に於けるロオマとの抗争に於て繁く用ひられ始めた。併しながら當時なほ階層的隔離が大であつたが故に、ルッターの Nation は貴族僧侶等の上層民を包括するのみで、民衆は Volk なる語を以て區別された (Letz: Vösk u. Wöden d. Nation 一四頁)。斯くの如き民族の脆弱性の故に、宗教的情熱の高まるにつれて、それは遂に民族意識を壓倒し得たのであらう。

戰爭は古來夥しくあつたが、これが近世に至つて民族の自覺を媒介するに至つたのは、民族的文化共同體と人類社會とが、近世に於て初めて並行して發展した事情に

よるのである。而して近世の民族的鬭争の中心となり、従つて此の鬭争によつて覺醒する民族成員の主觀的共屬の焦點となつたのは、民族の成立に對する中世的な障礙を除去する主力となつたと共に、その後民族的鬭争の中心をなした國王であつた事は、極めて自然であるが、戰爭を有利に遂行し得んが爲には、國力の總てを擧げて之を戰爭の爲に適切に用ひる必要があり、此の必要に應ずる爲には、全國民の一切の活動に對する命令が一途より出で、此の命令に全國民が絶對的に服従する事によつて、一糸亂れざる統制を實現確立すべきであり、これ即ち國王の專制を絶對化する事に外ならない。斯くの如き國王に於ける國家意志の一元的發動とそれの強行によつて、全國土が整一化され地域的區劃分立の除去された事、従つてまたこれによつて民族的文化共同體の成立が推進された事は多大であつた。斯くの如くにして確立し來たつた近代絶對專制主義は、資本主義の基本要素をなす企業精神と才能とを養成するに與つて力あつたと言はれる程、それはあらゆる方面に互つて大衆を組織し、その生活の微細なる點にまで干渉を加へた (Somhart 前掲書、二六八頁)。君主の宮廷政廳は臣民をして誤りを避けて正道に就かしめ、彼等の意志に反しても彼等の家計

を如何に整へるべきかを教へる事を自己の責務とすると稱し、所謂警察國家として社會を刑務所或ひは兵營に化したとされる程 (Mitscherlich 前掲書、二〇九頁)、人民の行爲の一切に容喙指令を加へたのであつた。此の積極的にして又廣汎且綿密な干渉統制は、徴稅以外には無爲放任に終始した古代國家に見るを得ざるものであつて、此の近代國家の特質こそ近代國家をして民族形成の中樞的要因たらしめたものである。集權の專制國家の成立する事の早かつた西歐に、近代民族の成立も亦早かつた事の最大の理由も茲に存在する。

斯くて絶對化された國王の觀念に民族的なるものは總て歸屬せしめられ、民族意識は國王の統一する國土への祖國愛の形を執り、愛國心は長い間國王への忠誠と不可分離的に結合してゐた (右同書、一八三頁)。此の頃の文學は何れも右の傾向を反映してゐる。例へばシェイクスピアのジョン王からヘンリー八世に至る史劇は、祖國愛や他民族の蔑視と共に、王權の至上性國王の神聖性の主張と讚美を表現し、十七世紀のフランス古典劇に於いても亦同様の態度が目立つのである。コルネイユのシンナに於ける皇帝アウグスツスへの崇拜と忠誠や、オラースに於ける國家に對する義務の故の家族愛の犠牲、又モリエ

ールのアンソントリオンや執念やタルチーフに關する戯曲等に於ける王の讚美と辯護等の如きは、何れも此の例である。而して戦争によつて國王意識と結合した民族意識は、戦争の反復による王權の伸張につれて、國王意識の背後に退き之によつて掩はれるに至つた。例へばホルベールは國王と祖國は同一物を意味すると信じ、又リッネーは王を「神の生ける模像」と稱した。此等の例によつても知られる如くルイ十四世の頃には祖國愛は人民にとつては王朝王家への愛の義務に還元された (R. Michels: Zur historischen Analyse des Patriotismus, Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik 第三六卷、一九一三年、三一頁)。即ち生成の日猶淺かつた民族は眞の自覺に至り得ずして、國王意識の故に却つて自己意識を喪失し、人は遂に國王あるを知つて民族あるを思はざるに至つた。茲に於いて當時の絶對專制君主は自己の肆意を民族の上に置き、國土人民を自己の家産視し、之を自己の子女の婚姻の際に、嫁資として割き與へ、又自己の婚姻關係に基づいて之を相續繼承せんとするが如き民族を無視せる土地住民の分割や合併を敢へてする場合も尠くなく、これが爲に戦禍の生ずる事も屢々あつたが、斯くの如き場合にも民族の立場から國王を批議するが如き者は現れな

かつた事は、民族の主體制未しの感を持たしめるものである。當時猶民族は歴史の基體ではあつても、主體とは言はれ難きものであつた。

民族的文化共同體の内容をなす文化が未だ多く又その特殊性が低い場合には、その共同體の所屬員の民族としての主觀的帰屬も微弱であり、従つて若しも一定の文化が特に尊重される事著しければ、その文化を共通にする者は、民族的には所屬を異にしてゐても、相互に帰屬を感ずる事民族的帰屬感にまさり易い。従つてまた斯かる場合には、此の一定の文化の及んでゐる諸民族を包括する超民族的なる社會が、一つの高次の統一體として意識に上ると共に、民族的祖國は閑却されるのは、自然の事である。十八世紀は普遍的なる理性の尊重された時代であつて、全西歐民族に共通なる合理的なるものを特に價值ありとした啓蒙思潮の起るにつれ、超民族的な世界主義乃至世界公民主義の流行を見、人は民族の特殊な努力や獨自性に對しては何等の感覺も有たなかつた。精神に於ける民族的なるものは所謂普遍的なる人間性を束縛し混濁せしめ昏迷に陥れるものとされた (M. Scheler: Nation und Weltanschauung 一九三三年、二七頁)。實に人は當時最早や祖國は必要がないと感じ、斯かる心術が大

陸の人間にあつては何等の矛盾にも遭遇しなかつた。それは古代の世界主義が民族を没却する抽象を犯したと正に軌を一にするものであつた。例へばヴォルテールは愛國心は自愛心と偏見とより成り、餘りに屢々吾人をして吾人の同類に對し敵たらしめるに過ぎぬものであると言つて (Michals 前掲書、三八頁)、眞實の愛國心が民族的自覺の表現なる事に注意せず、レッシングは彼自身一般に祖國愛に就いては何等の概念をも有たず、此の愛は彼には精々のところ一つの英雄的な偏愛 (heroische Schwellheit) であるやうに思はれると言つてゐるが如きも亦同様である。ドイツ民族性への熱意を抱けるクロップシュトマクが殆んど奇人と見られたのも此の頃の事である (Westemach 前掲書、一八三頁)。

併しながら斯かる世界主義の行はれた程超民族的普遍者が増進し意識された時代には、他方またこの世界的普遍者を基礎として民族を反省し、民族乃至祖國の獨自性と自己の之への共屬とを認めつつ、諸の民族が相寄つて高次の普遍者としての人類社會乃至世界を構成する事を認める眞實の即而對自的 (an-und-für-sich) なる民族主義も現れて、民族を通じ之を媒介として人類世界の發展を計らんとすると共に、他民族を知らず、之を無視す

る獨善的なる民族主義を排する世界公民主義も唱へられた。例へばヘルダーの如きはこれであつて、彼は次の如く主張してゐる。即ち如何なる民族も神によつて選ばれた地上の唯一の民族ではない。故に歐州の如何なる民族も他に對して自己を閉ざして、愚かにも唯我が許にのみ至ての知慧は存在すと揚言するが如き事は許されない。人間自然史の守護神はあらゆる民族の中にまたその夫々と共に、恰もそれが地上の唯一のものであるかの如く生活する。各民族は他に對して權利を等しくして居り、何れも他を抑壓すべき權利はなく、各自は自己の流儀に従つて、文化又人間態 (Humanität) を平和な勞作によつて促進すべきである (M. Scheler: Christentum und Gesellschaft 一九二四年、八〇頁)。斯くの如き世界公民主義はまた前記の抽象的世界主義と屢々同一人に於て交替して現れてゐる。レッシングは後にはドイツに於けるフランス文學の跋扈に對して、ドイツ文學の爲に闘ひ、フィヒテもナポレオン戰役を契機として態度を轉換してゐる。斯かる事實は當時の民族意識及び世界意識に動搖多く、未だ何れも一般に確立されるに至らなかつた事を示すものである。

フランス大革命は中世以來の地域的及び階層的障壁を



撤して、民族的文化共同體を實現すると共に、革命を鎮壓せんとする諸外國との戦による此の新文化共同體の否定を媒介として、民族的共屬の意識及び意欲をも確立した。しかもこの戦によつて確立された民族意識は、自己の肆意を至上のものとして民族を無視する傾向ある專政君主への服仕に轉化する事なく、專制君主からの解放によつて、民族成員が全體として主體的に決意行動せんとする自覺に立つものであつた。茲に初めて客觀的並びに主觀的構成要素を明確に兼ねた民族が完成された。斯くの如き民族は此の時まで見られなかつたものであるが故に、之を特に近代民族として、之以外の民族と區別せんとする試みもあるのである。而してフランスが自由平等の名に於いて範を示した封建的區劃分離の殘滓の撤去が、既に成熟に向ひつゝあつた歐洲の諸民族に大なる刺激を與へた時に、ナポレオンの征服戦争によつて各民族は痛切なる否定を體驗し、之によつて夫々共屬の意識及び意欲を明かにした。ナポレオン打倒を可能ならしめた有力なる因素の一つは、此の新生民族意識であつた。ナポレオン戦役以後、民族の價値は歐洲のあらゆる國々に於て、詩人文人によつて宣明された。イギリスではウォーズワース、ドイツではアルント、イタリアではマン

チニ、フランスではシェニエー等が、民族感情の價値を説教した（Joseph 前掲書、一八〇頁）。而して眞に充實せる民族的文化共同體の反省意識に伴ふ共屬の意欲は、此の文化共同體の維持發展の爲の民族の獨立との擁護の爲の國家との要求となる。これ即ち民族主義（Nationalism）であるが、民族主義は從つて近代民族の基本的特質をなすものである。故に近代民族の成立せる十九世紀以降はまた民族主義の時代とも呼ばれるのである。とは言へ民族主義は十九世紀に入つても常に民族問題の指導原理であつたのではない。戦争が民族意識を背後に押しやり君主意識を前面に出さんとする傾向は、猶屢、力を振つた。ナポレオンも民族の意義を十分認めず、ウィーン會議も民族の意義を全く没却した事は、當時の識者が多く民族を如何に考へてゐたかを雄辯に物語るものである。併し此の會議の民族の無視によつて、既に成熟を刺戟促進されつゝあつた諸民族の中特に不當なる扱ひを蒙つたものは、此の否定を媒介として民族意識を尖鋭化し、此の會議の決議を實踐に於いて駁撃し無効にして行つた事は、此の頃から民族主義が民族の事件を處理する生ける力となつた事を示すものであり、ドイツ、イタリアの建國も亦此の趨勢に乗せる最も著しい民族主義の成

果である。

民族主義の時代と言はれる十九世紀は、また高度資本主義の時代とも言はれる。資本主義經濟が經濟の支配的形態となり初めたのは、西歐に於ても十九世紀の半頃であるが、此の資本主義の進展に伴ひ、無産労働者が増大した。此の無産大衆と上層有産者との間には、經濟的差異に基づいてあらゆる他の文化領域にも差異が存し、前者は經濟的に無力なる爲に後者の文化に參與し難いところがある。而して上層民に共通なる文化を内容とする文化共同體が通常民族的文化共同體と呼ばれるものであり、此の共同體の民族的特質は、此の共同體に參與せざる下層民にとつては無であり、下層民はあらゆる民族的評價から全く解き放されてゐるとして (Baner 前掲書、一五三頁)、現代も猶文化の階層的區劃差異が大であり、下層民は依然として所謂民族の小作人たるに過ぎず、下に共通なる文化共同體は存在しないと主張する者もある。一九一二年にもパウエルの國境汎國には、幾百萬ものパウエルの所謂民族の小作人即ちゲーテやカントの名を耳にした事も決してない無學者はたく重荷を負へる苦力がある事にに基づき、パウエルに賛同する者もあつた (Verhandlungen d. zweitendutschen Soziologentages 八一

頁)。他方又斯く上層民と共に同一の文化共同體を構成せずと主張される下層民は、此の主張の故に上層民と民族的共屬感を感じざるに共に下層であり無産である事に於て共通性を有する他國の下層民と、此の共通性を基として共屬感を感じるは自然であり、斯く共屬感を感じる者が結束せんとして超民族的な國際主義 (Internationismus) が提唱された。

併しながら此の國際主義に於ける下層民の共屬は、右の如き經濟的事務を中心とする特殊領域に存する共通性を基とするに止まるに反し、爾餘の殆んど一切の領域に於ては、相互の自由にして頻繁なる接觸交渉に對する地域的制限の特に大なる各國の下層民には相互の共通性が乏しい。此の經濟以外の諸領域に於いては各國の下層民は夫々多大の特殊性を有し、此の特殊性の總體は夫々の下層民集團の民族的特殊性をなすものであり、此の特殊性よりする各國下層民の差異の故に、下層民が民族的に分化し、彼等にも民族的多様性の存在する事は、下層民を民族の小作人なりと主張する者自らの力説するところである (Baner 前掲書、第二版序文、二七一八頁)。他方また同一地域に於ける上下兩層の間には、假令或度の共通ならぬものがあるとしても、猶多大の共通文化があり、社

會の階層的構造が封鎖的階層たる身分層の崩解によつて、階層内に所屬員の出入周流の行はれる開放的階層としての狹義に於ける階級と成つた事により、又國家の上下兩層に共通なる整一的統制や、下層民の向上を計る社會運動等によつて、同一地域の上下兩層に共通なる普通文化は益々その量を増大し來つた。例へば、確かに現今ドイツの青年勞働者の指導的部分には、ドイツ文化の大部分が生きてゐると言はれる(H. Heller: Socialismus und Nation 一九三一年、四五頁)が如きは、他のあらゆる國々に就いても言はれ得るであらう。故に現代に於ては、上下の階層に通ずる文化の共同が極めて大であり、上下兩層が諸共に單一民族を成してゐる事を無視して國際主義を唱へる者の人間の概念は、今猶、實に十八世紀の自然的正常人即ち自由主義のホモ・エノミクスの理論的構成物に止まるものである。此のあらゆる自然的基礎から解き離され自由に理想的に自己規定を行ふ人間は、任意に編入も解除も出來るものであり、自然と文化に根を下してゐるところがなく、民族なるものを知らず、現實から疎隔せる幽靈である。故に勞働者も亦民族の構成員として他と何等異なる事なきを認知する者は、右の如き抽象的なる人間概念に立脚する國際主義を廢棄して、勞働

者階級も亦彼等の自己伸展の爲に民族がそれ自らを保存すべき事を意欲せねばならず、民族もその自己保存の爲に勞働者が彼等の自己を伸展すべき事を意欲せねばならぬ事を強調するのである(右同書、五三―五四頁)。

(7)

以上未開民族から現代歐洲民族に至るまで民族構造は如何なる發展段階を経て來たかを通觀したが、最後に民族として特異な位置を占める支那民族の構造を眺めれば、支那民族には西洋の古代及び中世に見られた諸特質の存在する事が知られる。支那も歴史時代に入つた時は大帝國を形成してゐた。これは原始時代の民族間の鬭争と征服との結果であると推定され、その後も民族の鬭争と混和とは絶えなかつたが、此等の民族を構成せる人種は、何れも第一次的基本人種としての蒙古人種に屬する第二次以下の人種であり、従つて體質の同化も困難ではなく、文化に於いては支那民族が卓越せる優秀性を有してゐたが故に、支那に入り來つた他の民族は何れも此の先進文化を模倣採收し之に同化された。而して此の同化を促進し保持する爲の主要手段たる交通が、支那には古くから發達し陸路及び水路も既に秦の頃相當の整備を示して居り、之によつて、亂世に於ける中絶を反覆しつゝ

も、全版圖の國家的統制が可能であり、文化の中心と地方各地との接觸交渉も保持された。従つて支那には古くから衣食住を初め言語・文學・政治・經濟・道德等のあらゆる文化領域に於いて、國土又はその周邊にまで共通にしてその外に對して特殊なる基本的様式が存在した。斯かる普遍的な基本文化を共同にする集團が即ち通常漢民族と呼ばれる支那民族である。併しながら此の支那の傳統的普遍文化は高度の地域的階層的分化を容れるものである。即ち支那の文化的等質性は高度の異質性の根底に存在する基本的特質の等質性であつて、その具體化された様式は地域的階層的に大なる差異を有する。この點に於いて支那はロオマ的キリスト教的文化に化せられ之を共通の普遍者となしつゝも、此の普遍文化を地域的階層的に分化せしめながら實現してゐた中世歐洲と相通するものがあると言はれ得るであらう。而して歐洲大陸にも比すべき廣大なる支那は、斯くの如き水平垂直の兩方向の分化差異を存続せしめる社會の地域的及び階層的區劃封鎖を含みつゝ國家的に統一されてゐた者に於ては、古代の大帝國と類似するところがあると見られるのである。

支那には原始時代以來民族鬭争が屢々行はれ、この結

果として奴隸の發生を見た事が多いのみならず、經濟的その他の事情よりして家内奴隸は常に存在したが、上下の文化的同化は急速であり、従つて上下の差異は顯著ではなかつたのみならず、支那の主要産業たる灌溉農業には奴隸が不適當なる故、奴隸は單なる補助としての意義を有するに止まり、大なる社會層を形成しなかつた。支那の一般民は灌溉農業の特質よりして高度に定住的になり、従つて農民の生活は自ら耕地を中心とする狹隘な地域即ち村落内に封鎖され易くなる。支那に於いて農民が古來如何に地域的に細分封鎖されて現代に到つたかは、村落をつなぐ道路が現代も猶頗る不備である事によつても明らかであるが、同一の事は更に支那には現代も猶同姓の血族集團より成り又はこれが主要部分を成す村落の極めて多い事によつても示される。歐洲中世もその後半に於いては村落の紐帶は血縁から地縁に轉化してゐた事を思へば、支那農民は正に歐洲中世の村落又は古代社會の下層民と同様の段階にあると言ふことが出来るであらう。しかも支那の同血族集團は鞏固なる祖先崇拜によつて結合されてゐる點に於いて、同様に氏族制の鞏固なりし古代のギリシア、ロオマ等の早期に對應するが、祖先崇拜の確立するは、血族が相寄つて定住する所に成立つ

封鎖性の故に生活が傳統的になり、傳統に最もよく通ずる長老者が權威を有つと共に、又小地域の封鎖性の故に血族相互のみの密接なる生活の共同の故に、その間に熟知親愛が深まつて、長老者も血族の愛護に努め、従つて尊敬愛慕を捧げられ、斯く尊敬愛慕を捧げられた長老者は、死して後も血族の密接なる共同生活の故に死者の記憶を鮮かに保つ現存血族の追慕の對象となるところに於いてである。従つて支那に祖先崇拜が確立して今に至つた事は、支那社會が古代より今に到るまで地域的に細分され、各々の小區劃内に血族が昔ながらの封鎖的共同生活を營んで來た事を物語るものである。

支那の村落が歐洲の古代及び中世前期の村落に對應する封鎖性を有すると同様に、支那の都市も亦西洋中世都市に類似せる性格を有する。即ち支那都市に於ても西洋中世都市に於けると同様に同業組合が鞏固に發達し、組合員には一定の條件を課して自由競争を禁止し、又一定の事業を獨占して組合員以外に對する排他性が強く、組合員の數も制限し、その資格を主として父子相傳するが如きは、何れも西洋中世の同業組合とその軌を一にするものであるが、斯くの如き組合の存続し得るのは、都市の封鎖性が大であつて、人及び物の出入移動乏しく、

居住民は累代住居を變ぜざると共に、外界から新奇特殊なるもの入り來る事によつて、住民が異質的に分化して統制を困難ならしめる主義的個人主義の發生すべき可能性に乏しかつた事を物語るものであらう。而して支那の都市に於ける各組合は單に業務を共にするのみならず、政治・經濟・宗教の共同の外社交・疾病・死亡・災禍等に際しての相互扶助、寡婦・遺兒・貧困者の世話、共同の危險に對する防衛、争議の裁判調停、官吏や他の集團との交渉等を初め、あらゆる行動生活を共にする事に於いても、歐州中世の同業組合と同様である。斯くの如きも亦組合員が居住の所を一にし終生密接なる接觸交渉を續けて渝ることなき場合にのみ可能となる事である。更に支那の都市の著しい特質をなすは同郷團體の鞏固なる事であつて同業組合にして同郷組合なるものも多く、或は同郷團體の内部に於て職業の別に従つて別々の組合を形成してゐる場合も尠くない。同郷團體は所在地の同郷者を總て包括するのを原則とし、所屬員は一切の生活を共にする。斯くの如き同郷團體の存立する事は、郷黨と然らざる者との間に差異があり、しかもそれが大にして且生のあらゆる領域に互るが故であらう。即ち他郷人の間に太なる差異の存する場合には、彼等は相互に

理解の範圍を越え従つて氣味悪きものとして感じ合ひ、相互交渉は齟齬混亂を生じ易いが故に、相互に嫌惡拒否し合ふは當然であり、之に反して同郷人の間では、一切が熟知されてゐるが故に、寛さの中に勞少くして效大なる交渉があらゆる生の領域に於いて可能である。斯の如き交渉を繁く續け得るやう、同郷人は相寄つて居住すると共に、他郷人を交へざらんとして郷黨相結ぶに至るのである。此の郷黨團結の強度は、郷土と異郷との差異の度に應ずる事が蓋然的であり、現今諸國の大都市に同國人同志が夫々相寄つて特殊街區を形成するのも、國を別にし民族を異にする者の間には大なる差異が存するによる。然るに支那人が包括的にして鞏固なる同郷團體を形成する事は、彼等の郷里の異同は今日の歐米人に於ける民族的異同と同様に感ぜられる程、各地の生活様式の差異が強く感ぜられるによる。而して斯くの如き生活様式の地方的差異は、各地が高度の封鎖性を有し、生活様式傳播共通化が行はれざるによる事は明らかである。之に反し若しも各地が開放的であるならば、人及び物の移動が多くなり、これに伴つて各地の共通なる生活様式が増大するが故に、郷里の異同による人間の差異もなくなり、人間の結合の規定因素としては、郷里異同以外のもの

の有力になる事は、歐米社會の近狀に徴して明かである。又更に人間の移動が激しくなつて、幼少年期を諸方で過さざるを得ざる爲、郷里と稱すべきものを有たざる人間さへ多くなり、郷里の尊重の如きは自ら減弱する筈である。然るに支那に同郷團體が現今も猶鞏固に榮えて居り、又一般の支那の愛郷心が強く、他郷にあつても特定の時期には歸郷するを原則とし、歸郷する能はざる者は故郷に送金し、老後の餘生は故郷で送るを念願とし、他郷に死んでも故郷に葬られるを期するが如きも、皆故郷と異郷との差が大なるに基づくのである。此の大なる差異は各地から集つた都市住民間も依然として保持されるが故に、同郷組合乃至同業組合が何れも獨自の度量衡・貨幣及び商慣習を有し、従つて相互の交渉取引が複雑混沌たる事バベルの塔にも比せられるのである（根岸信、支那ギルドの研究、二二二頁）。斯くの如く各組合があらゆる行爲様式を異にして分立する都市に、此等の組合を結合するところに成立つ都市自體の全體的統一性の存在せざるは當然である。之に反して、西洋中世都市にあつては、職業の分化はあつても、市民の全體に共通な傳統的行爲様式が多く、組合はそれの有機的統一體としての都市の分肢として、都市そのものの内的調和を繁榮と

の見地から活動するを常態とした。即ち西洋中世都市に於いては各々の組合の中に都市なる全體が生きて、自己を働かせ自己を表現してゐた。各個の組合・仲間・團體・協會のみならず、全市民が都市に於いて愛と憐みを共にし合ひ、各人は「各個人皆が一人の爲に、一人が各人皆の爲に」せいふ原則に従つて自ら進んで全體に奉仕した (Müller 前掲書、四二四—四五頁)。これ即ち西洋都市が共同社會の類型的なるものとして擧げられる所以であるが、支那都市は斯くの如き都市の共同社會的統一性を缺如し、單に諸組合の並存集合に止まるのは、各組合の故郷の分離差異が、組合にまで入り込み、都市内部の分離差異となつて、その等質性を不可能ならしめてゐるに由るところ大である。

右の如き支那社會の地域的細分封鎖の根柢には、支那國家の無爲放任の態度が存在する。支那國家の官吏は徵稅以外殆んど無爲であつた。納貢以外の活動は各地各團體の自治に任せて放置するを常とした。此の事は官吏の登用試験科目が文章詩賦乃至經學であつて、之に合格せる官吏は國務を執るよりも讀書・社交等に時を過す事多く、長き専門的教育を基とする合理的なる法律の合理的解釋と適用を事とする西洋近代の國家の官吏とは、その

本質を異にする點に於いて明瞭である。同時にまた斯かる官吏の上にある君主も專制君主ではあつても、西洋近代專制君主と本質的に異り、人民の生活のあらゆる細部に迄互つて大小となく容喙命令して、富強兵策を強行するが如き事はなかつた。而して支那國家を西洋近代國家から本質的に異ならしめる此等の特質は、やがて前者をして西洋古代國家に類似せしめるものなることも自ら明かであらう。

徵稅以外に一般民とかゝはりなき支那官吏は支那の上層民の中心をなしてゐた。而して官吏になる道は科擧の如き登用制度によつて下層民にも開かれてゐたのであるが、事實上は、種々の時代によつて種類に變異はあるが、下層民が官吏となり従つて上層に昇る事は極めて困難であつたが故に、社會層間の人間の出入移動は稀であつた。受験者は秋京師に赴いて春歸郷する迄の往復及び滞在の費用、竹に寫字せる往昔の書物の稀少高價なる事、合格迄に長い年月を要した事、金を以て官位を得又は縁故を辿る請託も有効なりし事等によつても推知される如く、科擧によつて上層に至る事も資産地位を必要とした。此の事を物語る文獻は既に唐代に多く、清末に至つても亦同様である。斯くの如くにして官吏たり得可き

上層民と然らざる下層庶民との別が自ら別れ、兩者は封建的に隔離される傾向を有した。但し法の上に於いては階層間の移動は禁止されてはゐなかつた點に於いて支那が、實質に於いては、兩者の間に大差はないのである。

又支那には有力なる支配的身分層としての武士乃至騎士の層が發達しなかつた。此の點に於いては支那は西洋及び日本の封建社會と根本的に相異する。併しながら社會層間の差別と距離との強化強調は、支那社會の基本特徴をなすと見られる程著しく、此の點に於いては支那の身分制は封建的身分制と合致するのである。支那の身分的體制の維持強化に與つて力あつた儒教が我が國の封建社會に於いて尊重され、封建的社會體制の基本的支柱の一とされた事は周知の如くである。所謂支那社會の半封建性は禮制・法制・風俗等の全てが身分の差によつて細かく特殊化されてゐた。禮は人と人との交りに一定の形を定め、それ以外の仕方にて自由に肆意的に交はるるを抑制する側面を有するものであるが、支那が儀禮の國なる事は改めて言ふまでもない。しかもこの禮には何れも上下の別が含まれてゐるのであつて、例へば服喪の如きも身分によつて期間衣服その他を別にするが如く、同一

の行爲も身分の上下によつて皆その形式を異にするべく禮によつて規定されてゐる。

以上の如き事情によつて支那には古代から現代まで、時代によつて大なる差はありつゝも、身分的區別隔離が存在したのであつた。此の區別隔離は同時に文化の階層的分化相異とならざるを得ない。上層民は官吏として政治を獨占するのみならず、その身分的地位の前提としての富を有し、且官吏在職の際にその間に富が集積さるるが故に、富力に於いて庶民との間に懸隔がある。官僚と富豪とは支那では同意語となつて居る（橋樑、支那社會研究、二九頁）。即ち上層民は文學文章語を同じくするのみならず、彼等に共通な國語としての官話がある。併しながら官話が庶民に行はれる地域は頗る隘く、一般には官吏と庶民とは話を交へることすら出来ない。又文學を解するは上層民であつて、文學の國支那の庶民大衆は文盲である。故に上層が事とする文學詩賦經學等を初め一切の精神文化には大衆は殆んど參與し得ない。この點に於いて支那の大衆下層民は正に上層の民族に對する民族的小作人の名に値ひするものと言はれよう。

廣大なる地域を國家的に統一しながらも、上に官僚の薄層が位し、下層庶民大衆は上層民の文化から排除され



又税の徵納以外は之と交渉することなきと共に、下層民の地域的區劃封鎖が著しきが故に、異郷の者と異民族の如く感ずる程文化の地域的異質性が大なる點に於いて、支那は古代の大帝國と類縁を有する事大なると認められるのであるが、其風の意識及び意欲に於いても之と類似する。即ち大部分の支那人の生活は郷土の血族集團内に集中され、外界と交渉する事なく、外界と共通なるものに乏しいが故に、彼等には當然血族や郷土の觀念が強く、民族祖國の觀念が乏しい。古來支那人は、上層民と雖も家事を以て國事よりも重しとなし、帝王我に於いて何かあらんやと言ふが如き國政國王人の無關心が一般民の態度であつた。愛郷心はありながらそれが強いが故に却つて愛國心は稀薄であり、一般民は國家又民族の運命から全然と言はれる程獨立にして自然的なる生活を營んで來たのである。しかも此の事は支那が外敵と鬭争關係に入るといふ否定を蒙つた際に於てすら淪る事がなかつた。例へば北清事變の際に英軍は山東省で支那人から購入した驛馬を用ひ、又最も缺く可からざる苦力勞働を外國軍隊の爲になしたのは、その爲に香港で雇つた支那人であつた (A. H. Smith: Chinese Characteristics 第十三版、一一三—一四頁)。右の如きは現代支那が西洋中世の未だ近

代民族が明確な形を執らざりし段階に近似するを思はせるものであるが、支那は更に他の一面に於いて古代の段階と相通するものを有する。それは即ち中華思想であつて、支那は古來周圍の異民族を夫々東夷西戎南蠻北狄と呼び來つた事は、支那が異民族から自己を區別しつゝ支那人としての共屬を意識してゐた事を示すものではあるが、同時に自己の文化が餘りにも周圍から卓越してゐた爲に、此等異民族と自己とを並位の關係に置いて眺める事なく、眞の意味に於いて人類なるは獨り支那人のみであつて、他は完全なる意味に於いて此の名稱に値ひせざるもの等級を異にするものと考へた事を表示する。此の點に於いて支那人は西洋古代に於いてギリシア人まで人類社會なる觀念を缺如し、自民族のみを至上乃至中心となしてゐる即自的なる態度と軌を一にするものである。これ主として支那の民族文化が早くも漢代までに完成し此の獨自なる傳統文化と比肩對立し得る文化を有する異民族の文化との眞摯なる接觸交渉を有つ機會がなかつた事情によるであらう。支那は少くとも清朝の中葉までは、外國との對等的交渉を生ぜず、外來思想の流傳も稀であつて、思想界に大變動が無く、自國本位を以て萬般の事象を解釋し得た。(那波利貞、中華思想、岩波講座、東洋

思潮、六六頁)。併しながら現代に至つて支那に於いても交通通信が漸次發達し、これによつて農村郷土が次第に開放される傾きを示す。此の事は種々報告されてゐるところである。例へば既にカルプの如きも、その調査せる鳳凰村が近年に至り他村との接觸を増すと同時に諸の通信形式による外界の人々との文化的接觸を繁くして來た事を報じてゐる (D. H. Kulp: Country Life in South China 一〇六頁)。此の變革は一面に於いて文化の地域的共通化を進めると共に、他面に於いては國家機能の積極的活動を誘發した。同時にまた支那そのものと外國との接觸交渉を推進し、これによつて舊き中華の思想の動搖すると共に、次第に民族意識はこの長き卽自態から脱して覺醒し初めた。清末以後民族的自覺は急速に強化され、三民主義を初めあらゆる政治運動は何れも民族主義を高唱し來つて今に至つた事は、周知の通りである。但し今日も猶日本が外國か支那の一部かさへ辨へざる農民も少くないと言はれる支那には、依然として地域的階層的封鎖の中に沒民族的态度を持してゐる下層民が存続し、支那民族の構造には中世乃至古代的なるもの含藏されてゐる事を思はしめられるのである。

印度に於ける、地域的及び階層的細分封鎖は支那のそれ

よりも遙かにまさつて明確鞏固であり、従つて印度人の民族的構造は古代乃至原始的なる段階に在ると言ふべきであるが、その詳細な論述は他の機會に譲る。(完)

本稿の一部は昭和廿一年十一月十七日京都帝大に於ける史學大會の席上「民族構造の變遷」と題して講演したものである。